

## 和の国

日本の国が世界の歴史の舞台に初めて公式に登場したのは、一世紀のことである。『後漢書』に書かれてある「後漢の光武帝が、“倭”の奴国王に合印を授けた」とあるのがそれである。

“倭”は、それ以来、我が国の国名として用ひられるやうになり、八世紀に編纂された『古事記』にもこの字が用ひられてある。然し、この頃には訓読されてみて、“やまと”と読まれてある。

“やまと”といふ言葉は、“山戸(門)”もしくは“山跡”といふ意味の言葉であって、当時の朝廷が在った地方の名称である。その“やまと”といふ言葉を“倭”といふ漢字に当てたものである。例へば、『古事記』には、“かむ神やまと伊い波は礼れ毘ひ古こ命のみこと”“やまと倭たけ建の命のみこと”などの表記が見えるが、この例である。

然し、“倭”といふ漢字は、「わ矮小」といふ意味の“委”と“人”とを組合せて作った会意字であって、「矮小な人(ちびすけ)」といふ意味の漢字である。中国人は、自らを“中華”とか“中国”とかと称して誇ってあるが、周囲の国々に対しては、西方は“戎”南方は“蛮”北方は“狄”東方は“夷”といふやうに、悪い意味の漢字を用ひ、これを卑しめてみた。“倭”といふ呼称もその例だったのである。

そこで、この“倭”といふ悪い意味の漢字を使ふことを避けて、これと同じ発音で良い意味を有った“和”といふ漢字を用ひるやうになった。また、これに美称の“大”といふ字を冠して“大和”とも書いた。然し、これを訓読する時には、“和”も“大和”も、共に“倭”と同じやうに“やまと”と読んだのである。

ところで、この“和”といふ漢字ほど、日本の国名を見事に表現した文字は無いであらう。と言ふわけは、『古事記』が伝へてある我が国の最も古い国名は、「豊葦原水穗国」であるが、これを煎じ詰めると、正に“和”の一字に凝縮されるからである。

“和”といふ字は、豊かに稔った稲穂の形を象った“わ禾”と“口”とを組合せて作った会意・形声字であって、「稲が豊かに稔り、十分に口に入る」といふ意味から、「食が足りて心が穏やかである」といふ意味を表した文字である。(“倭”も“和”も、古くは“くわ kwa”といふ発音であった)

原始の時代の人間は、食べ物を求めることが、生活の総てであった(と言っても過言ではないと思ふ)。だから、食べ物が足りなくなると、生きるために命を懸けて他人の食べ物を奪はうとする、それが古代人の生活であった。だから、略奪から身を守り、平和を保つためには、町全体を防壁で囲はなければならなかった。中国やヨーロッパは、今でもさういふ昔の城壁が、至る所に残ってある。

## 日本語の再発見

然し、日本には、昔からそのやうな必要が無かったから、さういふ城壁が全く見られない。ただ、奈良と京都だけが、町全体を城壁に囲まれてあるけれども、それは中国の都を真似て都を造営したからであって、決して防備のためではなかったのである。

このやうな事実を見ても、我が国は、「食べ物が豊かに満ち足りた国」、つまり「和の国」であった事が解る。“和”、つまり食べ物が豊かであれば、心は自然と“なごやか”になる。それで“和”を“なごやか”とか、“なごむ”と訓読するのである。“平和”とは、さういふ心の状態を表した言葉である。だから、我が国は、昔から「和の国」、つまり「平和の国」だったのである。

「日本」といふ言葉は、七世紀の初め、遣隋使の書状に用ひられた「日出づる国」を漢語で表したものと思はれる。然し、これが“ニホン”とか“ニッポン”とかと読まれたのは後の事であって、初めは“やまと”と読まれたのである。